

コスモス

第4次 **12**

戦時下「むらさき」にみる金子光晴 暮尾 淳 14

コスモスと壺井 秋山 清 21

清水清詩集〈重い彼方〉批評 西 杉夫 26 黒川 洋 29

河合俊郎詩集〈遺言〉批評 吉田欣一 32 砂木宗治 35

木原実詩集〈漂う草〉批評 村松武司 38 暮尾 淳 42

私のリアリズム (8) 松永浩介 50

■ 木原 実 10	押切順三 12	村松武司 12
詩 高島 洋 16	長谷川七郎 22	伊藤正斉 23
西 杉夫 24	緒方宗平 28	黒川 洋 36
暮尾 淳 41	北本哲三 46	野口清子 47
河合俊郎 49		

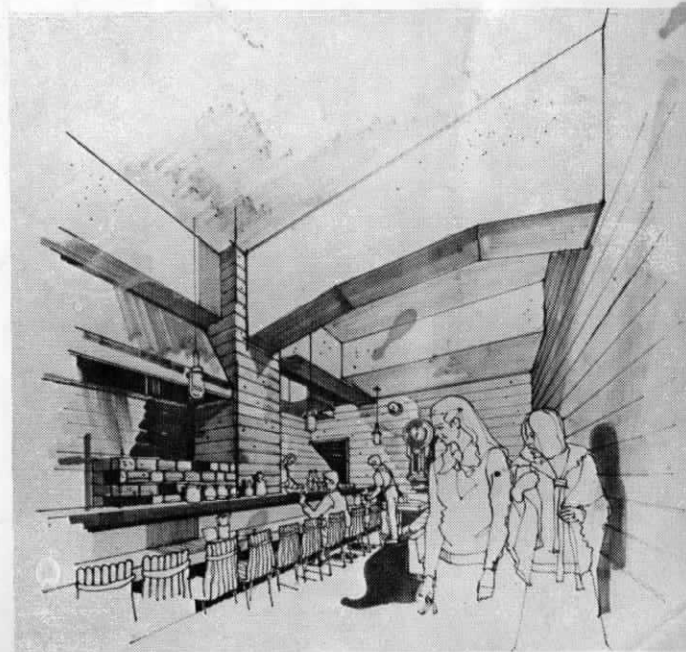
コスモス雑記 2~11

向井 孝 高島 洋 黒川 洋 伊藤正斉 木原 実
河合俊郎 押切順三 北本哲三 緒方宗平 清水 清

1975年12月

珈琲屋

かゝてら



ビラについて

向井 孝

陸橋をのぼりかけたたん、つと、ビラが差出された。——韓国への公害輸出をやめるノ関西実行委員会……

と、のぼりきつた処で、また一枚。——大阪日中友好祭……

日曜日の午後四時。時計はまだ十分まえを指している。

天王寺駅から近鉄百貨店へと渡る通路は、ゼニガメや動く人形を箱の上にならべた大道商人で、緑日のようだ。

手すりにもたれて動かない一群は、ぼくと同じように、誰かを待っているのだろう。

通路の降り口にダンボール箱が二つおいてある。丸めたり、折り

たたんだり、そのままの新しいビラが、投げこまれてもりあがっている。

とおりがかりの半数が、手にしたビラを、さっさと棄てていく。

ときどき風が、二枚、三枚と吹きちらす。足許にきたそれを、ぼくはふとひろいあげる。それからさっすうけとったビラも一しよに

半分につけて、紙ヒコーキのように飛ばす。

飛ばす途中で、おもわず手がとまる。——投げ棄てられるのは、ぼく自身ではなかったか——

いま眼下で一せいにスタートした自動車の、はげしい騒音の中へ、まるで身投げのように、ビラの一

枚が落ちていく。

× × ×

思えばこの十年間、ぼくもまた同じようにビラを、せせとつくとつてまいてきた。

若い仲間と一しよにまいたビラの数は、およそ三百種、十数万枚になるだろう。

原稿を作り、ガリを切り、それから刷って截断して、発送用の封

筒かきや切手はり、そしてきょうは手分けしてのビラまき……

そのときどきの手伝いはあつても、殆どの仕事は一人二人でやらねばならぬのが、常だった。

だがしかし、そうしてまいたビラ一枚一枚の、おもえば空おそろしいほどの数は、一体どこへ消えてしまったのだろう。

出来上ったビラをかかえて、一せいに街へとび出していく、あが意気込みやおもいの結果は、いま

一体どこにのこっているのだろう。とすればぼくにとつて、ビラとは本当に何なのか——

配ることと同じように、受け取ることが棄て去ることではない、

ビラとは何か。手渡した瞬間から、その掌のなかでみるみる皺ばんでいく、紙きれの意味とは一体何か。

もともとビラは、それそのものとして、文字が印刷された一枚の紙片にしかすぎない。

とすれば、文字が意味する内容と、その形象化としての印刷技術、そしてそのまき方がこそがビラを紙片とちがわせているものである。

この三つを完全に具足すればするほど、ビラはますますビラとして機能するだろう。

だが、そのことに加えてそれ以上に、自分がつくり、自分がまくビラは、何よりもぼく自身、おのれそのものの提示を意味している、それだからこそぼくはビラをつくるのだ。

× × ×

そうなのだ。ビラは、それゆえに、ぼくなのだ。

そしてまたぼくのビラまきは、渡したビラをぼくとして受けとめる、何千、何万分の一回の「出会い」の相手のためにこそある。

だがそのようにしてまくビラを、そのたびごとのぼく自身として、その一枚一枚を出会いのために、ぼくはつくつてきたのだろうか。

つくりもののことばでかざられた、しごくおざなりなビラの内容も内容なら、ビラまきのやり方もともかく早くすますために、手当り次第に配るだけではなかったか。

出合いは、もともと一対一のものだとすれば、ぼくはまず「ぼく

自身が完全にビラとなる」ことで

「ビラをぼくとして受けとめる相手」と出会う以外にない。

そのために、すくなくとも第一ただ一人、その相手のおも

いを、ぼくのおもいとする事ができるときだけ、訴える。

第二——かざらず、気取らず、ざつくばらんに、日ごろ使いたれた会

話ことばで云えるときだけ、書く。第三——ただ一人、その相手との出

会いのためゆえに、そのためにのみビラをまく。数ではない。

——ということなのだ。

午後四時三〇分

ぼくの待ち人は、まだ姿をみせない。

左右の階段から盛りあがつてきて、とめどなくあらわれる人たちは、橋のまん中でぶつかり波だ

ちながら、とび散ったビラを何気なく踏んで通りすぎる。

夜から雨という天気予報だが、橋上は薄い西日が射してきて、いま、一だんにとぎやかなざわめき

だ。

職場抵抗の多様化

高島 洋

遠く夕映えのビルとビルとのあいだを走る、高速道路の空のむこう、生駒山はきょうは、煙霧で見えない。

神戸の詩誌「G」同人の和田英子

が「神戸現代詩研究資料——一号」に次のような作品を発表して

いる。

飛べない——

スクラップ置場に黒くやせた鳥

がもがいていた

足に鉄粉と油をこねたコイルター

ル状の塊りをつけ

もがく程塊りは大きくなってゆ

く

停年近い、元傷夷軍人の同僚が

片手でハトを掴み片手で粘り塊りを剥いでゆくと細い足から血が流れ

幾筋も掌に伝わった

空腹が機械油の匂いに下り立たせたか

粘りから脱け出たハトは又もやスクラップ置場へ歩こうとして小さくよろめいた

同僚は建材置場の柵にやせたハトをそつと置いた

近づく夜にハトは動かない

窓ごしの部屋には男が一人居残

っていた

時間がくるとクーラーのスイッチ

を切り

窓の施錠をたしかめ、ドアの鍵

をかけ、電源を切つて帰宅する

朝出勤するの一番である

勤続三十年

海鳥に似た顔に眼鏡をかけ、この国の象徴の称号と呼ばれる男

いつ自らを仕事のラインから外したのか

責任ある仕事はあくまで固辞し

分厚いデータ・シートをめくり、

ソロバンを入れ（るふりをし）煙草をふかし、トイレに立ち、右肩

を心持ち上げて食堂へ行く

無遅刻、無欠勤、休暇はとらぬ

雇することがある」という一項を

労働協約のなかに挿入している苦である。労資協議の上であるから、労組が強硬に反対すれば回避できる場合もあるけれども、精神病院へ入院した場合などは私病として自動的に退職へと追込まれてゆくのである。

いつ時「よく仕事をする奴でよく文句を言う奴には注意せよ」という合言葉が経営側の間でささやかれたことがあった。尖鋭なセクトに所属する労働者が変革運動を進めながら、一方で経営側にすきを見せまいとする態度であろうが経営側にそう警戒せしめるデータがあったのかも知れない。

今日でもそのように積極的な労働者も多いであろうが前記の飛べない男のように消極的な抵抗者が増加する傾向にあるのではないだろうか。もっとも今日のように不況による解雇制度が流行している場合は、まづ先に目をつけられる存在ではあるが。そういう意味から前掲の作品「飛べない」は、そういう職場の一面を鋭くとらえ

ているものと言えよう。

走り書き

黒川 洋

11号の小坂太郎の「10号の作品を読んで」の冒頭の部分のなかに「詩の、また詩運動の前衛の姿が時代の霧のなかでとらえにくい」とき」という文脈がある。その発語が小坂太郎のどの辺りからなされているのか、私の個人的な思いと絡みながらひつかかるのである。「……とらえにくいとき」と書いてある以上、詩運動の前衛を認めたいという発語に違いない、その立場が小坂太郎の拠点であるのであろう。

詩の前衛であるとか、文学の前衛であるとかを掲げる文学の団体はいくつかあることはある。しかしながら、それらの団体がメディアに對する反メディアという形でしか関われないうという、どうしようもない対立の原則を自己のギリギリのところでお互いに確認しあ

ったうえで成り立ちであるのかという疑問を持たざるを得ない。

近年にない秋山清の悲しい文章を同じ11号で読んだ。50号(通巻)記念に寄せられた「花のコスモス」である。(抱えた問題の質と量の大きさに比べたら、ほとんど何もなかった、といわれても仕方なく首を垂れるしかないままに、コスモスの表面から舞台の袖にかくれてしまった私らである。)この言葉が秋山清個人のものではないことを割り切っても悲しいのだ。このように書かねばならぬ私のなかに大きな甘えがあることは十分承知のうえだが、さて、70年代の方法論はというとき何もない。より自己を切りつめていくことしかないという極めて原初的なところにはかたがたにいたる。50年代、60年代にかけての文化、労働運動の渦中や、その周囲で青春を燃やし続けた先人達(この年代を政治の季節などと口をぬぐっている人種も)が70年代においては企業や居住のなかで中堅以上の年代である事実、その後押しをしたの

は秘められて居るのではなからうか。そういったマニフェストが權威、指導性を持ったときその運動体は死に絶えたものとしてのいいのだ。コスモスがその地平までたどり着くとき秋山清の言う「宇宙」が「けてくるのだと思う」。

(75・9・30)

詩集雑感

伊藤 正 齊

木原実の第一詩集、「漂う草」がといた。第一次の「コスモス」六号で、「渤海附近」という作品で、すばらしい詩人だという印象をうけた以後、彼の作品をあまり読んでいない。同じく七号では、「中野重治の歌」八号では、「近代の停滞」という評論を読んで、さらに印象をふかくした。詩人木原実をほんとうに深く心に焼きつけられたのは、第三次「コスモス」の「挫折を超えるもの」という評論である。第三次のコスモスでは、人民詩精神という歌い文句で、さ

らに充実した各自の詩の方法のもとに作品活動をするという申し合せのようなものがあつたが、人民詩精神の論理というものには乏しかった。そういうときに木原実は、第三次コスモスのマニフェストのような評論を書いてくれた。私はこの評論で大きなばしをうけた。

しかし第四次五号の、「コスモス」表紙の詩、「畑の中」を読んだとき、木原実に対する私の夢は破れた。その詩が、今度出た「漂う草」のなかに入っていないかつたのをみて、ほっとした。第三次「コスモス」五号の、「落選候補M・Kに」というコスモス雑記で、「代議士が軽んぜられるのは、末世に生きる人民の、嘆きと怒りの深さがはかれないからだ。べつに詩人の仕事が高尚で、代議士のやる事が俗の俗などというのではない。ただ人民が河の深さを知っているのに、代議士たちはいつも浅瀬で騒いでいる。それも僕たちの怒りだ。」そうした代議士として、詩人としての木原実を、愚作を一篇

書いたからといってとやこういうほどのことではない。と私は自分を叱りたい気持ちだ。今度の彼の「漂う草」がそれを証明している。この詩集を八月十五日に発行したという著者の祈りのことが表紙の帯に書いてある。

私たちは毎年八月十六日に河合俊郎の、伊良湖の家にあつまることになっている。そのころは、いつも海は、晴れているときも波が荒く、泳ぐにはあまりいい時期ではない。大かた風模様のときが多い。しかし河合は、この十五・十六、十七日の間をくずそうとしな

い。その河合俊郎の第七詩集、「遺言」は七月一日発行となっている。吉田、錦、私など、彼の出版記念会を提言したが、今回は出版記念会は一切やらないといひ、拒否したが、四人だけなら受け入れるということだった。八月十六日に、彼の家に集り、近くに住んでいる杉浦明平一人だけを招いて五人の出版記念会を開いた。その日も台風五号のあおりで伊良湖の海はすさまじい荒れ方であった。とき折

が我々の世代であり、今日のGNPの第二位のしつ返しを思うとき、それら無数の群像のカオスにしか時代を予見する行為は起こり得ないのだ。その群像のいち個人の自我を自分自身へのマニフェストとして創りあげて行く地平にしか詩を行為の部分として位置づける拠点はないのだと思う。ひとつのある目的のためや、エビゴネンや外的ドグマ、そしておのれ自身のドグマからも解き放たれなければならぬ、唯一、おのれの組織化のために書く、その書かれたものが一人歩きしようがしまいが関わりのないことなのだ。そういった一期一会の運動にこそ可能性が潜んでいるように思えるのだ。

日々、剥落していく想いのなかをかすめるのは運命的でさえあつたコスモスとの出会いにほかならない。しかしながら、作品でしかつきあえないという70年代の様相はコスモスも同じであるけれども同人個々の根づきの想いを拡大していくところにコスモスの可能性

りはげしい雨が降ってきた夜更け、東京でのコスモス同人会で、酒が入って、金芝河のことで、河合が「金芝河の詩、ありやたいしたものじゃないね」といったという、村松武司の「コスモス雑記」の「詩人を論ず」が問題になった。「ありやたい詩人ではないね」といった河合の言葉は、金芝河の作品を評価する上で、誤解されやすい言葉ではあるが、私は、河合がほんとうに金芝河の詩が、たいした詩でないという批判をやつてくれることに反対するものではない。それには村松の書いた雑記のニュアンスを充分読みとることが必要である。

詩集「遺言」は彼の七冊の詩集のうち、「岬の星」「漁火」につづく、力作ぞろいの詩集だと思ふ。とくに異郷にての各詩篇は、河合までおとろえずという感をあたえてくれる。巻中、「面影」という詩は、教え子の金貞子とうたった詩である。力作だと思ふ。この詩の載つた「幻野」九号を、朴政権のもとで暮している金貞子に送つ

(一九七五・九・七)

詩集を出して

木原 実

の三十余年の精神の軌跡だナと思ったり、それにしても軽いなと思ったり、まあ、さまざまな思いが去来した。

ともかくひとつの区切りがついたと思うようになって、少し落つた。落ちついてみると、これからはもつとホンモノの自分の詩を書かないと大変だと思ふようになった。エライことである。ひりすてた糞の重さ。自分にはおわなかつたその臭気に追われて、こんな筈ではなかつた自分の詩をみつめてある。あるかねばならんと自分に言いかせているココロの雄々しさに、われながら驚いた。

詩を書くといふことの業の深さもさることながら、なるほど詩集を出すとは、こういうことであつたのかと、ひとり合点をするようになって、どうやら構えができればめた。詩を書いて、それを読んでくれる友だちがいるといふことは、それにしても何とすばらしいことか。

友よゆるせ。ぼくの「漂う草」といふあの詩集は、ほんとうはう

んだ。彼のきびしい批評の姿勢が、この詩集の作品のなかにあることを知った。

どこかで清水の詩のぬき書きのようなものを読んだことがあつたが、いままで、一度も彼の作品にお目にかつたことがなかつた。彼が、こんないい詩を発表しなかつたのは、おれの詩など、そうたいたものではなかつたと思つていたためだろうか。そう思つていたら、恐ろしい詩人である。方法的に秋山清に似ているという感をうける以外は、いい作品がそろつてゐる。

今の時期に、吉田、木原、清水の詩集が出たことは、重い意味を投げかける思いがする。戦後三十一年の独占資本と、帝国主義者と不況。ベトナムに敗れたアメリカへ日本の天皇が訪問する問題等、そこに生きるわれわれ一人一人の姿勢が問われるときがきている。

これらの詩集が戦後まもなく出ていたら、戦中、戦後の詩論の書かれかたがちがつたものになつていたのではないだろうか。

今、彼らにきびしい批評の姿勢が、この詩集の作品のなかにあることを知った。

どこかで清水の詩のぬき書きのようなものを読んだことがあつたが、いままで、一度も彼の作品にお目にかつたことがなかつた。彼が、こんないい詩を発表しなかつたのは、おれの詩など、そうたいたものではなかつたと思つていたためだろうか。そう思つていたら、恐ろしい詩人である。方法的に秋山清に似ているという感をうける以外は、いい作品がそろつてゐる。

今の時期に、吉田、木原、清水の詩集が出たことは、重い意味を投げかける思いがする。戦後三十一年の独占資本と、帝国主義者と不況。ベトナムに敗れたアメリカへ日本の天皇が訪問する問題等、そこに生きるわれわれ一人一人の姿勢が問われるときがきている。

これらの詩集が戦後まもなく出ていたら、戦中、戦後の詩論の書かれかたがちがつたものになつていたのではないだろうか。

そつぱちの頃で、これからお見せするのが、ほんものの私の詩なんだ。

「五行」について

河合 俊郎

金芝河の詩「五行」と、論文「良心宣言」を同時に読んだ。さすがに一篇の詩に生命をかける人だけあつて、たいした詩だと思ふ。特権に反抗する生き方の徹底した闘いぶり。詩と行動が統一され確信にみちた熱情、やはり、金芝河は偉大な詩人だと感心した。

「私が要求し聞いとうとしてゐることは、徹底した民主主義、徹底した言葉の自由―それ以下でもそれ以上でもない。」と彼は書いている。言葉の自由は今の韓国では死へもつながつてゐるので、その信念と徹底的抵抗には頭がさがる。たいしたもの、畏敬さえ感ぜずにはいられない。

前に「五賊」を読んだ時も感じたことだが、今、「五行」を読ん

でも同じように思うことは、たいした詩であるのに、私にはどうもおもしろくない、真似の出来ないすばらしい詩であるのに、読んでいてつまらない。いいかえると、直撃弾のような強烈な衝動は感ずるのに、涙のするような感動にならないことだ。これはいつた何からくるのだろう。勿論、私個人の無知や好み、翻訳詩であるという理由もあるが、政治的なアレゴリーや、キリスト教的な終末主義的想像力が先に切つてきて、芸術的な香りが後まわしになつてしまふのである。

やい、この野郎 隠したカミソリ出してしまへっ！
ポケットが重そうにふくれているあやつ ひつ捕えい
この野郎 隠した金槌出してしまへっ！

このような表現に接すると、私は、昭和の初年、日本の「戦旗」や「プロレタリア詩集」に載つていた勇ましい詩を連想してしまふ。無論、質はちがうし、それらより高度の比喩や諷刺があり、民族的

幻想、象徴性などがとり入れられ溶解されているが、私にはよくわからない。やはり朝鮮語の原文が読めねばだめだろうか。もともと、外国の詩は原語で読まねばわからないというのは定説になつてゐるから、詩の技術を論ずるのは無理だろう。こんど「五行」を読んで強く感じたのはこのことだ。偉大な詩であるが技法的におもしろくないという裏には、「良心宣言」にはつきり書かれてゐるように、「抑圧と収奪に反対して闘ふこと……それが私の思想的、実践的関心の全部である。」という金芝河の方法の基盤を発見したよるこびである。金芝河は金芝河でいいのではなからうか。

「これ以上のいい詩があつたら見せてもらいたい」とか、「日本人はだめなのか」などと坐り直つてきかれても困つてしまふ。いい詩がないから、だめな日本人になりたくないが、私たちは詩を書いているのだと答える外はない。前回の東京同人会で、私は近年になく泥酔して、前後不覚、何を

しゃべつたか、いつさい覚えていないが、村松武司さんの指摘のようにな、金芝河に触れたとしたら、ここに書いたような独断が、意識中断のどこかにあつたのだからと思ふ。あの時も今も、金芝河についての感想は変わっていないから、失礼をおわびしながら書きとめておく次第である。

オルグ考

押切 順三

いま私は、古新聞の切抜きなどから戦後まもなくの、茨城県・常東農民の甘藷価格闘争の記録を拾い読みしている。二十四年から始まり三十年代初めにかけての、常東農民組織協議会が中心となつての売りどめ戦術による価格闘争であつた。農民が自分がつた甘藷を売りどめして澱粉工場やアルコール会社との団体交渉によつて価格を引き上げさせようという戦術であつて、団体交渉権の確立、売りどめ、不売などの農民ストラ

イキの形成であった。この闘争によって甘藷の一般相場一俵当り一九〇円が七十円高二六〇円で売却出来たと報じられている。生産農家を組織し、部落毎に販売組合をつくって全農家の統一行動があったので成功したのである。団体交渉値以下では売らない、販売組合を通さない個人売り、つまり抜け売りしないというかたい団結がなければならなかった。

私はこの「闘争」に興味を持ったのは、農民の経済闘争方式で、自らの力でかちとる組織活動であったことであるが、さらにこの組織づくりのためのオルグ活動の特殊性であった。「あくまで農民の自覚にもとづく自主的組織を確立する」ことがオルグの活動目標であった。部落の販売組合は、上からおしつけたものではダメで、農民の大衆討議によって申しあわされたトリキメであることが大事であった。オルグは農民同志の大衆討議のとりもち役であった。そのためこの闘争ではオルグは「五分以上しゃべってはならない」とされ

た。戦前の農民闘争におけるアジテーションをぶつオルグとは異つた新しいオルグ像をみることでできる。五分以上しゃべってはならない、は明確な指示だ。事実、年少のオルグでもこの指示を守って組織の実績をあげたと報じている。「この闘争についてのくわしい記録があったら拝借したいものだ」

清水 清へ

北本哲三

上京した折を利用して、時たま清水清を訪ねる。そのときまづて云われることは「政治に埋没されてはいけない。詩を書くことは大事なことだ。詩が書けなくなったらおしまいだ」ということばだ。コスモスの連絡にも余白を利用してきつとその意味のことを書いてくる。私もそのことを考えているので敢えて反論をしないでいる。ところで、そのご当人である清水はさっぱり（ほとんどといった方が正確なようだ）詩を書かない。

専ら他人の書いた詩の批評をひきうけたカタチになっている。いつか会った時は「おれは詩を書くことをやめたよ」なんていばつたみたい云つてたことがあった。これはいったいどうしたことかと思つたが、私はその時それを聞き流した。

その清水がどう思つたのが先頃詩集「重い彼方」を出した。もつともかなり以前から木原と共著で詩集を出すとはいつていたが、単独で出すなどとは聞いてもいなかったのでびっくりした。「あとがき」によると、「急に片づけてしまいたい気になった」そうだが、なにを片づけてしまいたい気になったのだろうか。「原稿を読みかえてみて、太平洋戦争から三十年もたった今さら、この程度の詩集を出す意味はない、と考えるようになった」そうだけ、私はそんな気持を否定出来ない。それはそれとして、この詩集に私は感動した。今さらいうのもおかしいが、清水が身につけていた詩の技術の高さはたいしたものだ

と思う。目次によると内容が「1」「2」「3」と分けられているが、私は「1」と「2」にいい作品が集中されているように思つた。「3」では「さくら」がいいと思つたが、これはたしか私たちの「処女地帯」に発表した作品だったと思う。戦後三十年経つてこの詩集が出たことは、私は清水とは反対に大変意味があつたと思つて

いる。特に戦中の作品群など、その構成に於てまことに優れ、戦争や軍隊を知らない若い世代にも共感や感動をあたえずにはおかないであろうと思う。

詩集「遺言」

緒方宗平

河合俊郎の詩集「遺言」を手にして私は美しいと思つた。今もそう思っている。地味ではあるが、クリム色のカパーと薄茶の地肌を白を配した、それは見た目にそう、指先でなでてみたくなるような、そしてなでてみる。その柔かい感触にたのしささえある。串ざしにされた四匹の魚は何を意味するのか私にはわからない。とにかく中身の烈しさとは違つた思いがないでもないが、美しいと思つた。

河合が住んでいる愛知県渥美郡渥美町和地一九とはどんなところか私は知らない。漁村かそこに近い海よりのどこかの静かなところであろうが、静かではあつても村も町も海も汚されていない昔ながらの美しい海辺ではなからう。そんなところのように思える。そんなところに腰を据えて目をひから

したり、曇らしたりしながら遺言を書くつもりで詩を書いていてという河合にはちよつと近よりがたい思いがする。

コスモスに發表した河合の詩はおしなべて評判がいい。ポカがない。これは詩を書くものの詩としてあたりまえのことだろうが、力量がないとそうはいかない。發表されたその都度コスモスのなかまがする作品評をみてもそれはわかる。

コスモスに發表されて評判のよかつた詩を主としてできたこの詩集は、だからできが悪からうはずがない。詩集の批評は12号に砂木宗治が書くはずだ。

コスモスに發表されなかつた詩がいくつかある。それはコスモス以外のほかに發表したもの、書いて机の引出しにしまいこんであつたのかも知らないが、この詩集ではじめてお目にかかる詩がある。その中に「泉」というのがあつて、私はこの詩がこのまじい。目をつむつてこの短い詩を思うとき、コンコンと湧く森の泉が浮んでくる。

絵のような美しさと、律動的な砂をふきあげる烈しさがあふれている。この泉が河合をとらえたものは私が勝手に思っているような絵のような美しさなどではなかつたろう。それどころではないといつたものであつたかとも思う。

ある日、納戸にある母の古いタンスの抽出のなかにこれを見つけた。どうしてこの一冊だけが残つてそこにあつたのか、母に聞いてもわからない。勝つと思つていたら、思いこまされていた、そしてそれが負けた。鬼畜米兵が上陸する、女どもはどうなるかわからないと伝わって、それは波のように押しよせてひろがり、見たことも聞いたこともない山村に疎開した。そのあわただしいさわざにまぎれこんだらうといつた。それから

たいへん古いことで恐縮だが、ずっと前に貴司山治が「文学案内」を出した。「文学評論」がまだ出ていたが、出したいにも出せずに、出ていなかつたか、とにかくそのころだつた。その一冊が手許にある。表紙も裏表紙もちぎれてしまつて、中身のほうものつけから六三四頁で切れている。つまりばらばらになつた一部分である。黄茶っぽく変色して、かびくさい。

どうしてこれが手許にあるか。終戦になつて引揚げてきて間もな

とにかく、これは新人特別号か特集号かになつてゐるはずだ。小説、詩、短歌に別れていて、小説のところは破れていてないが、たしか佐野順一郎と外二人が書き、詩は大江鉄鷹、内田博外五人が書いて、その中に私のもある。短歌では青江龍樹、赤木公平、砂木宗

馴鹿

木原 実

馴鹿が跳ぶ。叢から叢へ。

驚き慌てて生きるおかしさは、しなやかな四肢に
春の踏む張りをみなぎらせて、跳ぶ。

ミズナラの立ち枯れた林に積る雪はふくらんで
かすかに古い時間が消えてゆくとき

空は水涕をすすり

体毛を重く垂らして春はくる。

生きる日の長つたらしさと、めぐりくる日の足ば

やな声に驚き

馴鹿は跳ぶ。

老年のきみの荒野は

重々しく対峙する国境にかこまれて

わずかにぼくの精神のカケラがとび散る。

百年を生きて

馴鹿はひとり。

ぼくはその影をもとめて国境にむかう。

こころ軽い野獣どもとすれちがい

やさしい叢の底の

名も知らぬ固い芽立ちをふみつけながら

立ちむかう雪まみれの道をいそぐ。

ふたたび還ることのない道を

馴鹿が跳ぶ。

治も書いている。

このあと「文学案内」がどのくらい続けて出たか知らないが「詩精神」が出なくなつて「詩人」が同じ「文学案内」から出た。もうこの辺のことになると、松永浩介書くところの「私のリアリズム」のなかに、おいおいと、そして詳しく出てくると思う。健筆をねがう次第。

いずれにしても、ぼろぼろの一冊の古雑誌を手ばなすことはなからう。

二つの出版記念会

清水 清

「コスモスの連中は清水の詩集をほめるだろうね。コスモスの同人はその程度のもだから」と秋山清が云つたが、私はそうは思わなかった。第三次くらい、ひとつの詩も書かないで、ひとつの詩の悪口ばかり書いてきたし、批評を連載しているあいだには、そういうお前の詩はどうなんだ、見せてみ

ことではないが、戦争の詩に限らず、詩がそういう形で共通の場を持つていることも確かであるだろう。

出版記念会は6月20日、銀座の珈琲店からでパーティ形式で行なわれ、村松武司と松永浩介のなかなかの司会ぶり、にぎやかであつた。出席者53人。遠くから向井孝、吉田欣一、岡田孝一、節子夫妻が来てくれ、かつて同人であつた山田今次や菅原克己も出席してくれた。秋山清が大サービスで相川音頭などたくさん歌い、向井孝も楽譜には合わない郡上節を、岡田節子さんも可愛い声で歌つてくれ、黒川洋の歌は意外にうまくつた。

木原実の出版記念会は9月26日に新宿の厚生年金会館で開いた。出席者31人。詩論会にしたいという木原の希望があり、発起人の一人である私も彼の希みのようにしたかつたが、木原も同人になつてゐる新短歌「芸術と自由」の人達が半分、詩の人が半分という事情もあつて、そうはならずにパーテ

ィで終わった。黒川洋が「三十代はこき使われる」などとボヤキながら、暮尾淳をアシスタントに、しゃれつきのない、一生懸命の司会をして、好感をもたれたようであつた。木原は、今号の彼のコスモス雑誌とほとんど同じ趣旨の挨拶をしたが、さすがにしゃべり慣れていた。伊藤信吉さんが「ぼくは年をとつていて、もういつ死ぬかわからないから、老人性ニヒリズムで、これから大いに政治に噛みついてやる」とスピーチしたのが印象にのこつた。私は「木原がいくら頑張つてみても代議士一人の力で政治がよくなるものではない、代議士なんか早くやめて、いい詩を書くべきだ。短歌や川柳など、いろいろ書くのもマイナス作用しかないだろう」といったことをしゃべつたものだから、短歌の小倉三郎と論争めいたことになつて、あとで暮尾淳が「あれはよかつた、あれで会のヤマ場ができた」とおだてられた。発起人でもある武内辰郎とその一党はどういうわけか一人も来なかつた。

ある季節

押切 順三

長いめしべ、細いおしべが
あるかなしの風を探している。

少年の首は細く、
酸素を求めて窓辺によった。

子房は種を孕んで、
かすかにゆれている。

けもの手がうしろからのび、
あつけなく少年は死んだ。
一九二三年九月一六日の夜であつた。

殺しの季節は今に続いて、
虫の声、鳥の声、あれは人の声。

橘宗一少年、一九一七年 米国ポートランドに生れ、
そのとき、数え七歳であつた。

殺しの季節のなかで、
わか野の花の群生。
地衣の類、地苔の類は地を覆い、
宿根の思想は地にもぐる。

ふりむいた顔、
少年を殺したその顔。

ヨメナの花はさかり、
盛りあがる花、花。

「大杉栄、野枝ト共ニ
犬共ニ虐殺サル」※

ミゾソバは野の星、
うす紅を刷いた白の花が
地表に近く、無数に。

(※橘宗一少年・墓碑銘から)

一九七五・九

広島への道

村松 武司

三十年たっていた
天皇と皇后は歩いていた
しずかに山道をたどり

広島までの追憶の旅であつた。

モンシロチョウが
ふたりをさえぎる
払っても 払っても

蝶はまといつてはなれはしなかつた
目をかわし

ふたりがほえむしずかな峠で。

やがて昼食

用意の地点にサモワールが待っていた
そこにモンシロチョウがとまっている
不意に湯が沸騰し

蝶が落ちた

蝶の翅に、最初のくろい雨粒が叩いた

広島から、翌日

ふたりはおなじ道をたどって帰るのだ

ふたたびモンシロチョウがさえぎる

ふたりはほえんだ

しずかに陽の光がさしているようだった。

払ってもついてくる蝶が

しかし きようは

ヒラヒラと遠去かる

天皇と皇后の、視線をうつすそのむこう

谷の岩に、ヒナギクが咲いていた

それまで蝶は

ふたりの人間に花の匂いを求めていたのか。

ふたりは泣いた

そこには蝶も戻らぬ 花もない

しずかな 山道。

(一九七五・八・八)

ある季節

押切順三

長いめしべ、細いおしべが
あるかなしの風を探している。

少年の首は細く、

酸素を求めて窓辺によった。

子房は種を孕んで、

かすかにゆれている。

けもの手がうしろからのび、
あつけなく少年は死んだ。

一九二三年九月一六日の夜であった。

殺しの季節は今に続いて、

虫の声、鳥の声、あれは人の声。

橘宗一少年、一九一七年 米国ポートランドに生れ、
そのとき、数え七歳であった。

殺しの季節のなかで、

わか野の花の群生。

地氈の類、地苔の類は地を覆い、
宿根の思想は地にもぐる。

ふりむいた顔、

少年を殺したその顔。

ヨメナの花はさかり、
盛りあがる花、花。

「大杉栄、野枝ト共ニ
犬共ニ虐殺サル」※

ミゾソバは野の星、
うす紅を刷いた白の花が
地表に近く、無数に。

(※橘宗一少年・墓碑銘から)

一九七五・九

広島への道

村松武司

三十年たっていた

天皇と皇后は歩いていた

しずかに山道をたどり

広島までの追憶の旅であった。

モンシロチョウが

ふたりをさえぎる

払っても 払っても

蝶はまといつてはなれはしなかった

目をかわし

ふたりがほほえみしずかな峠で。

やがて昼食

用意の地点にサモワールが待っていた

そこにモンシロチョウがとまっている

不意に湯が沸騰し

蝶が落ちた

蝶の翅に、最初のくろい雨粒が叩いた

広島から、翌日

ふたりはおなじ道をたどって帰るのだ

ふたたびモンシロチョウがさえぎる

ふたりはほほえんだ

しずかに陽の光がさしているようだった。

払ってもついてくる蝶が

しかし きょうは

ヒラヒラと遠去かる

天皇と皇后の、視線をうつすそのむこう

谷の岩に、ヒナギクが咲いていた

それまで蝶は

ふたりの人間に花の匂いを求めていたのか。

ふたりは泣いた

そこには蝶も戻らぬ 花もない

しずかな 山道。

(一九七五・八・八)